

伊勢物語の本文

《一一三段》

むかし、田舎わたりひしける人の下りゆく、井のわんに由やつあそびたるを、大人になりにければ、おふいの女も、恥がつかはしてありけれど、おふいはいの女をいそ得めと思ひ、女せいのおふいをい思ひへへ、親のあはすれども、聞かでなんあつける。わい、の隣のおふいのわんよりかくなん。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ゆにけらしな妹見ゆるわん

女、返し、

べふぐい振分髪も肩すきぬ君なみやして誰があべぐき
なまくらへへ、つねに本意のうへくあらじけり。

わい、年上の経ゆほひだ、女、親なくたよりなくなぬおへだ、ゆくのゆにこらなへて、あひてやせじて、河内の国、高安の郡に、いきかよる所出できにけり。わつかれふいのわんの女、懲しむ思くぬかしきもなへて、由しやうかねば、おふい、異心ありてかへるじやあひわい思ひへたがひて、前栽の中にかくれゆく、河内くいぬの顔にて見れば、いの女、ことよつ化粧じて、うちながめり、

風吹けば沖の白浪たつた山夜半にや君がひより越ゆる
しよみけぬを聞きて、限りなくかなしと思ひて、河内くいがずなりにけり。

まれーーかの高安に来て見れば、ほしぬいを心にくねへへられ、今はつかひけて、手でからぶるがむとりて、筒子のうの物に盛りけぬを見て、心うがりていがずなりにけり。わりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つへを居らん生駒山雲なかへしや雨は降ぬとも
といひて見いだすに、からうじて、大和人来おふくろ。おふいひて待つに、たびーー過ぎぬれば、
君来んといひし夜」とに過ぎぬれば頼まぬ物の恋ひへんや

といひけれど、おとこ住まずなりにけり。

《十七段》

年ごろをとづれざりける人の、桜のさかりに見に来たりければ、あるじ、
あだなりと名にこそ立てれ桜花年にまれなる人も待ちけり

返し、

けふ来ずはあすは雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや

《二十四段》

むかし、おとこ、片田舎に住みけり。おとこ官仕へしにて、別れおしみてゆきにけるまゝに、三年來ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、今宵逢はんむとちぎりたりけるに、「このおとこ來たりけり。「この戸あけたまへ」とたゞきけれど、あけで、歌をなんよみて出したりける。

あらたまの年の三年を待ちわびてたゞ今宵こそにゐまくらすれ

といひ出したりければ、

梓弓ま弓つき弓年を経てわがせしがごとうるはしみせよ
といひて、去なむとしければ、女、

梓弓引けど引かねど昔より心は君によりにし物を

といひけれど、おとこかへりにけり。女、いとかなしくて、後にたちてをひゆけど、えをいつかで、清水のある所に伏しにけり。そこなりける岩に、およびの血して書きつける。

あひ思はで離れぬる人をとゞめかねわが身は今ぞ消えはてぬめる
と書きて、そこにいたづらになりにけり。

能へ井筒

三番目物・鬘物。世阿弥作。五流の現行曲。

「祝言の外には、井筒・道盛など、直成能也。……井筒、上花也。」(『申楽談儀』)

前シテー里女(化身)

後シテー有常ノ娘(靈)

ワキー旅僧

アイー里人

第一段 ワキの登場。旅僧が在原寺を訪れて業平を偲ぶ

「名ノリ」ワキ『これは諸国一見の僧にて候。我この程は南都七堂に参りて候。又これより初瀬に参らばやと存じ候。これなる寺を人に尋ねて候へば。在原寺とかや申し候程に。立ち寄り一見せばやと思ひ候。〔サシ〕ワキ』さてはこの在原寺は、いにしへ業平紀有常の息女、夫婦住み給ひし石の上なるべし、風吹けば沖つ白波龍田山と詠じけんも、この所にての事なるべし。

〔歌〕ワキ『昔語の跡訪へば、その業平の友とせし、紀有常の常なき世、妹背をかけて弔はん、妹背をかけて弔はん。

第二段 シテの登場。里女が現れて仏の法を慕う

〔次第〕シテ『暁毎の閑伽の水、暁毎の閑伽の水、月も心や澄ますらん。

〔サシ〕シテ『さなきだに物の淋しき秋の夜の、人目稀なる古寺の、庭の松風更け過ぎて、月も傾く軒端の草、忘れて過ぎし古を、忍ぶ顔にて何時までか、待つ事なくて存へん、げに何事も、思ひ出の、人には残る世の中かな。

〔下歌〕シテ『ただ何時となく一筋に、頼む仏の御手の糸、導き給へ法の声。

〔上歌〕シテ『迷ひをも照らせ給ふ御誓ひ、照らせ給ふ御誓ひ、げにもと見えて有明の、行方は西の山なれど、眺めは四方の秋

の空、松の声のみ聞ゆれども、嵐は何処とも、定めなき世の夢心、何の音にか覚めてまし、何の音にか覚めてまし。

第三段 ワキ・シテの応対。里女は旅僧に塚のことを説明する

「問答」ワキ「我この寺に休らひ、心を澄ます折節、いとなまめける女性、庭の板井を掬ひ上げ花水とし、これなる塚に廻向の氣色見え給ふは、如何なる人にてましますぞ シテ「これはこの辺に住む者なり、この寺の本願在原の業平は、世に名を留めし人なり、さればその跡のしるしもこれなる塚の陰やらん、わらはも委しくは知らず候べども、花水を手向け御跡を弔ひまゐらせ候 ワキ「げに業平の御事は、世に名を留めし人なりさりながら、今は遙かに遠き世の、昔語の跡なるを、しかも女性の御身として、かやうに弔ひ給ふ事、その在原の業平に、『いかさま故ある御身やらん シテ「故ある身かと問はせ給ふ、その業平はその時だにも、昔男と言はれし身の、ましてや今は遠き世に、故も所縁もあるべからず ワキ』もつとも仰せはさる事なれども、此処は昔の旧跡にて シテ『主こそとほく業平の ワキ』跡は残りてさすがにいまだ シテ『見えは朽ちぬ世語を ワキ』語れば今も シテ『昔男の

「上歌」地『名ばかりは、在原寺の跡古りて、在原寺の跡古りて、松も老いたる塚の草、これこそそれよ亡き跡の、一叢ずすきの穂に出づるは、いつの名残なるらん、草茫茫々として露深々と古塚の、ま」となるかないにしへの、跡なつかしき氣色かな

第四段 シテの物語。里女は筒井筒の話と高安通いの話を語る

〔□〕ワキ「尚々業平の御事委しく御物語候へ

「クリ」地『昔在原の中将、年経て此處に石の上、古りにし里も花の春、月の秋とて住み給ひしに
「サシ」シテ『その頃は紀の有常が娘と契り、妹背の心浅からざりしに 地』また河内の国高安の里に、知る人ありて二道に、忍びて通ひ給ひしに シテ『風吹けば沖つ白波龍田山 地』夜半にや君がひとり行くらんと、おぼつかなみの夜の道、行方を思ふ心とげて、外の契りはかれがれなり シテ『げに情知る、うたかたの 地』あはれを抒べしも、理なり

「クセ」地『昔この国に、住む人のありけるが、宿を並べて門の前、井筒に寄りてうなゐ子の、友達かたらひて互いに影を水鏡、面をならべ袖をかけ、心の水も底ひなく、うつる月日も重なりて、おとなしく恥がはしく、互いに今はなりにけり、その後かのまめ男、言

葉の露の玉章の、心の花も色添ひて シテ『筒井筒、井筒にかけしまるがたけ 地』生ひにけらしな、妹見ざる間にと詠みて贈りける程に、その時女も比べ來し振分髪も肩過ぎぬ、君ならずして誰かあぐべきと、互いに詠みし故なれや、筒井筒の女とも、聞えしは有常が、娘の古き名なるべし

第五段 シテの中入。里女は有常の娘の靈である」とを仄めかして姿を消す

「ロンギ」地『げにや古りにし物語、聞けば妙なる有様の、あやしや名のりおはしませ シテ』真は我は恋衣、紀の有常が娘とも、いさ白波の龍田山、夜半に紛れて來りたり 地『不思議やさては龍田山、色にぞ出づる艳葉の シテ』紀の有常が娘とも 地『または井筒の女とも シテ』恥かしながら我なりと 地『言ふや注連縄の長き世を、契りし年は筒井筒、井筒の陰に隠れけり、井筒の陰に隠れけり

第六段 アイの物語。里人が旅僧に業平と有常の娘の話を語る

第七段 ワキの待受。旅僧は夢の中で有常の娘が現れるのを待つ

「上歌」ワキ『更け行くや、在原寺の夜の月、在原寺の夜の月、昔を返す衣手に、夢待ち添へて仮枕、苔の衣に臥しけり、苔の衣に臥しけり

第八段 シテの登場。有常の娘が業平の形見を身につけて現れる

「サシ」シテ『徒なりと名にこそ立てれ桜花、年に稀なる人も待ちけり、かやうに詠みしも我なれば、人待つ女とも言はれしなり、我筒井筒の昔より、真弓櫻弓年を経て、今は亡き世に業平の、形見の直衣、身にふれて

第九段 シテの舞事。有常の娘は昔を偲びながら舞う

「一セイ」シテ『恥かしや、昔男に移り舞 地』雪を廻らす、花の袖 「序之舞」

「ワカ」シテ『此処に来て、昔ぞ返す、ありはらの 地』寺井に澄める、月ぞさやけき、月ぞさやけき

第十段 シテの立働き。有常の娘は夜明けとともに姿を映す

〔口〕シテ『月やあらぬ、春や昔と詠めしも、何時の頃ぞや

「ノリ地」シテ『筒井筒 地』つづるづづ、井筒にかけし シテ『まろがたけ 地』生ひにけらしな シテ『老いにけるぞや 地』さながら見みえし、昔男の、冠直衣は、女とも見えず、男なりけり、業平の面影
【歌】シテ『見れば懐かしや 地』我ながら懐かしや、亡婦魄靈の姿は凋める花の、色なうて匂ひ、残りて在原の寺の鐘もほのぼのと、
明くれば古寺の松風や芭蕉葉の夢も、破れて覚めにけり、夢は破れ明けにけり

世阿弥作の能

初番目物	老松・志賀・高砂・難波・放生川・弓八幡・養老・鶴羽(廃曲)・布留(廃曲)
二番目物	箱崎(廃曲)・右近(観世信光改作)・富士山(金春禪鳳改作)
三番目物	敦盛・清経・実盛・忠度・屋島・頼政・通盛(改作) 井筒・采女・江口・姨捨・西行桜・関寺小町・檜垣・松風
四番目物	芦刈・蟻通・柏崎・砧・恋重荷・高野物狂・桜川・当麻・土車・錦木・花筐・班女 百万・水無月祓・阿古屋松(廃曲)・丹後物狂(廃曲)・通小町(改作)・船橋(改作)
五番目物	須磨源氏・泰山府君・融・楓・野守・鶴飼(改作)